



◎高温期での野菜の管理

今年は関東地方で史上最も早い梅雨明けを迎え、6月下旬から真夏日や猛暑日が続きました。8月も引き続き暑い日が続きます。今回は8月の野菜の管理と土壌診断についてご紹介いたします。

○ネギ（白絹病）



ネギ白絹病は土壌中に生息する糸状菌（カビ）が原因で起こる病気です。

葉鞘の地際部に発生します。はじめ、葉鞘表面に白色の絹糸状の菌糸を生じて褐変腐敗し、下葉から黄化していきます。症状が進むと、葉鞘地際部とその周辺の地表面に白色の菌糸が密生し、菌糸の中に淡褐色のナタネ種子に似た菌核を生じ、株は萎凋する。菌核は充実すると褐色く黒色に変化してしまいます。症状が激しいと株は枯死してしまいます。

かびによる病害で、被害株やその周辺に形成された菌核が土壌中に残り伝染源となるため、連作し



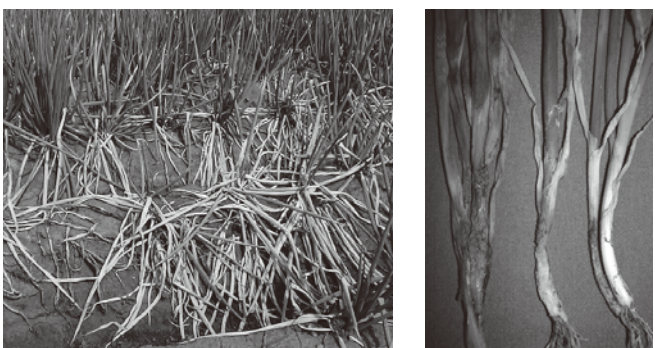
ている畑では出やすい病害です。

病原菌は高温性で、初夏～初秋にかけて発病しやすくなります。特に、夏期や平年より気温が高い初秋に、長雨で土壌が多湿条件になると激発するため、高温が続いたり、降雨があつた後など注意が必要です。発生後の防除は困難になりますので、土寄せを行う際に合わせて予防しましょう。

防除薬剤としては、モンカット粒剤（土寄せ時・収穫30日前4～6kg/10a）やユニフォーム粒剤（土寄せ時・収穫45日前9kg/10a）などがございます。



○ネギ（軟腐病）



軟腐病も白絹病と同様に高温（30～35℃）で発生しやすいです。地上部の生育不良やしおれから始まり、株元や軟白部が軟化腐敗し、腐敗臭が発生することが特徴です。細菌病のため効果的な薬剤が限られます。土壌伝染する病害ですので、株元にもかかるよう散布しましょう。主な防除薬剤はスターナ水和剤（収穫7日前 2000倍）

です。予防と治療の両方の効果がございます。



○トマトの生理障害

抑制作では高温、強日射によりさまざまな生理障害が発生します。特に着果不良は高温、強日射、灌水不足、萎れ、1、2段目の着果数が多い場合や活着が遅れた時、ホルモン処理が適切に出来ていなかった等が原因で発生します。

①高温対策

暑さ、強日射から植物を守るために、遮光塗布剤や遮光ネットの活用をしましょう。また天窓、側窓、妻面換気、循環扇等を活用しハウス内温度を低下させましょう。

②葉面散布

抑制期は植物の生育が早く、高温による根傷みも発生しやすい。為養水分が根から生長点まで届きにくいことがあります。ホウ素やカルシウム入葉面散布剤を活用しましょう。

③摘果

1、2段目の着果数が多い場合、葉で作られた糖が1、2段目の果実に集中してしまい、上段の生長点が細くなります。結果、不着果が発生しやすい状況になります。低段摘果を行い、樹勢の維持に努めましょう。

④適期定植

活着が遅れると根張りが悪くなり樹勢も低下します。苗が根巻きする前に定植し植穴の土に灌水することにより苗と土壌をなじませましょう。活着を良好にして根張り促進、樹勢維持を行いましょう。

⑤ホルモン処理

ホルモン処理をタイミング良く行いましょう。1花房あたり1～1.5cc、気温の5倍を目安に3日おきに散布をしましょう。

※化学性土壌診断による適正施肥

原料の高騰による肥料の値上げで組合員の皆様には大変ご迷惑をおかけしております。少しでも肥料にかかるコストを下げるために土壌診断をおすすめいたします。

土壌診断を実施し、土壌内の養分量を測定することで、養分量が作物ごとの基準値の範囲内外であるかを測定することができます。基準値より過剰な養分があつた場合、その成分を控えた低価格な肥料に変更したり、施肥量を減らすことでコストダウンにも繋がります。

コストダウン以外でも、作物の収量や品質を向上させるためにも畑の養分状態を確認することは重要となります。

【土壌診断に関するお問い合わせ先】

- ◇ 経済センター  
松戸市馬橋1939-1  
☎ 047-341-5151
- ◇ 流山経済センター  
流山市野々下1-304  
☎ 04-7150-2255

※農薬使用上の注意

農薬を使用する際は容器などに記載されたラベルの内容に従って正しく使用しましょう。農薬システムの使用回数に注意し、ローテーション防除を心がけましょう。